

地域研究委員会地域学分科会（第24期・第1回）議事録

1. 日時 2017年1月22日（月） 13:00～15:00

2. 会場 日本学術会議 6-C(1)会議室

3. 参加者（敬称略、以下同）

松原宏、宮町良広、伊藤悟、岩瀬峰代※、碓井照子、岡橋秀典、菅豊、田原裕子、中澤高志、
水内俊雄※、矢野桂司、山下博樹（※はスカイプ）

4. 議事概要

(1) 委員長・副委員長・幹事の選出

世話人の挨拶、出席委員の自己紹介に引き続き、委員長に宮町連携会員（以下、会員）、副委員長に水内会員、幹事に田原会員、中澤会員が選出された。

(2) 第23期活動の総括

添付資料に基づき、委員長が第23期の活動内容について説明した。具体的には、「地域学とは何か」を意識しつつ、会員が所属する各大学における地域学関係の取り組みを紹介し、議論するスタイルをとった。その経緯の中で、政策とのすり合わせが必要ということになり、COCやCOC+への対応に焦点がシフトしていった。2016年11月3日には、シンポジウム「地域学のこれまでとこれから」を開催し、その内容を雑誌『地理』に掲載したことは大きな成果であった。

その後、本分科会の設立の背景や地域学系大学・学部連携協議会との連携、市民地域学小委員会の活動について、意見交換が行われた。

(3) 第24期の活動計画について

標記項目について会員が一人ずつ意見を述べた。主な内容は以下の通り。

- フィールドワークと地図を使う「京都学」では、市民との連携に取り組んでいる。
- 地域教育を実践していくうえで、競争的資金がうまくつながらず、コーディネーターなど、せっかく構築したしくみが継続できない点が問題である。
- 「地域学を磨く」ことが今期の課題になるのではないか。
- 地域学の空間スケールを設定する必要があるのではないか。
- 「渋谷学」ではさまざまな視点から渋谷を総合的に分析するが、言うは易く、実践は難しい。
- 競争的資金を活用して、都市問題にエッジをきかせたプロジェクトを十数年進めてきて、かわる教員・職員のプラットフォームを構築できた。
- 地域の人たちが自分たちの地域をつくり上げることを促すのが地域学なのではないか。
- 地域研究委員会に民俗学の分科会がないのは問題である。
- 当面は戦略的な政策対応の議論と、中長期的な課題である地域学の構築の、2正面作戦でいかざるを得ないのではないか。
- 今期もシンポジウムを開催する方向で進めたい。提言についてはもう少し議論したい。

以上